

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03741

研究課題名(和文)「新型うつ」の予防と治療に関する心理学および精神医学的研究

研究課題名(英文) Psychological and psychiatric studies about the prevention and treatment of "modern-type depression"

研究代表者

坂本 真士 (SAKAMOTO, Shinji)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：20316912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：従来のうつ病とは異なる特徴をもつ「新型うつ」について、心理学と精神医学の双方から研究した。心理学では、(1)「新型うつ」につながる特性(対人過敏傾向・自己優先志向)を同定し、この特性がストレスを受けて抑うつ発症につながることを示した。(2)「新型うつ」の人が周囲からどう認識されているかを学生(日米国際比較を含む)・会社員(管理職・非管理職の比較を含む)などで調べ、従来型うつとの違いを見いだした。(3)「新型うつ」の社会的イメージを新聞報道や一般の人の認識を調べた。精神医学では、「新型うつ」の診断基準を作成し、「新型うつ」の気質を測る自記式尺度を開発し、バイオマーカーとの関係を調べた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「新型うつ」は従来型うつ病に対する治療では治りにくいとされている。本研究で「新型うつ」と結びつく特性や気質が見いだされ、ストレスを受け抑うつ発症につながることを示されたことから、本人に対する心理的介入の可能性が大きく広がった。また、「新型うつ」の人を周囲が否定的にとらえており、この周囲の人たちの反応が「新型うつ」の更なる悪化に寄与する可能性が示唆されたことから、周囲の人も含めた対策をとる余地があることが示された。精神医学では、新型うつと結びつくバイオマーカーがいくつかわかってきており、診断に役立つと期待される。

研究成果の概要(英文)：We investigated "modern-type depression" (MTD), which has different characteristics from traditional-type depression (TTD), from both psychology and psychiatry. In psychological studies, (1) we identified the characteristics leading to MTD (i.e., interpersonal sensitivity / privileged self), and showed that these characteristics lead to the onset of depression due to stressor. (2) We examined how people with MTD were perceived by their surroundings in students (including Japan and the United States), office workers (including managers and non-managers), and we found many differences from TTD. (3) We investigated the social image of MTD in newspaper reports and the perception of the general public. In psychiatric studies, we created diagnostic criteria for MTD, developed a self-administered scale to measure the temperament of MTD, and investigated the relationship with biomarkers.

研究分野：社会心理学

キーワード：抑うつ 社会系心理学 精神医学 心理的障害 新型うつ バイオマーカー 学際研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会問題としての「新型うつ」と実証的研究の必要性

従来型の抑うつとは異なり、嫌な出来事を経験すると抑うつ的になるが、余暇を楽しく過ごすことができるなどの特徴をもつ抑うつ状態(いわゆる「新型うつ」)が社会問題となっている。しかし、この問題に対する学術的研究は大きく遅れており、新型うつの発症および介入に関する実証的研究は必須である。

(2) 国内外の研究動向と、応募者のこれまでの研究成果および着想に至った経緯

新型うつに見られる状態は、以前から指摘されている(たとえば、逃避型抑うつ(広瀬, 1977)や退却神経症(笠原, 1978))。また、操作的診断基準 DSM における非定型うつ病は、新型うつとの類似性が指摘されている。しかしこれらに対する実証的な研究、とりわけ心理学的研究は極めて少ない。

このような現状を踏まえ、研究代表者(坂本)および研究分担者(加藤)は既に新型うつに関する実証的研究を始めている。坂本は、新型うつの性格素因を検討し「対人過敏傾向・自己優先志向」(以降、「対人過敏・自己優先」と略記)として新たに概念化するとともに(村中他, 2015)、測定尺度(対人過敏・自己優先尺度)を作成、信頼性・妥当性を検討した(Yamakawa et al., 2015)。また、新型うつの行動特徴のひとつである「うつ病の罹患を示唆する発言」が弁解として機能することを示したほか(Yamakawa & Sakamoto, 2015)、新型うつの発症に関する心理学理論を発表し、実証可能な仮説を提示した(坂本他, 2014)。加藤は、国内外の精神科医を対象としたピネットによる意識調査を行い、新型うつが日本だけでなく、米国、オーストラリア、アジア諸国など国外でも広く存在する可能性を世界に先駆けて報告した(Kato et al., 2011)。また、新型うつの診断や重症度判定のための多軸評価ツールの開発に取り組んでいる。

坂本と加藤は、新型うつに関する企画(日本心理学会大会シンポジウム, 2014年9月)を機に研究に関して交流を深めた。複数回の会議で意見を交換しながら、新型うつは学術的に解決すべき喫緊の課題であるが実証的研究が不足していること、お互いの専門性を活かして知見を積み重ね、新型うつの学際的理解を目指す必要があることで意見が一致した。そこで今回、坂本が研究代表者となって応募するに至った。坂本はおもに心理-社会的な面から、加藤はおもに生物学的な面から新型うつに関する研究を行うことで、新型うつに関する生物-心理-社会的な理解が進むと考えている。

2. 研究の目的

28年度から4年間の予定である。基礎的研究を行う課題A、B、C1で得た知見を活かしながら、課題C2、C3、Dを行う。なお、課題A~Cは坂本が、課題Dは加藤が担当する。

表1 本研究で設定した研究プロジェクトとその実施期間、対象者および目的

課題分類	個別プロジェクト名	期間	対象	目的
課題A 性格素因に関する研究	広範囲の実施(標準化)(A1)	28年	社会人	ネット調査を利用して、性格素因を測る尺度の標準化する。
	縦断的研究(A2)	28~30年	社会人、社員	社会人での予備研究後に、企業数社を対象に縦断的調査を行い、性格素因、ストレス、対処行動が抑うつ発症に及ぼす影響を調べる。
課題B 発症メカニズムに関する研究	ストレスの認知と行動(B1)	28年	学生、社会人	客観的に提示した同一のストレスの認知や対処行動が性格素因によって異なるか調べる。
	ストレス実態調査(B2)	28年	学生、社会人	実際に経験したストレスを調査し、その種類や経験頻度などが性格素因によって異なるか調べる。
	「新型うつ」の認知(B3)	28年	社会人	ピネット(もしくは視覚刺激)を用いて、「新型うつ」患者に対する社会的・対人的イメージを調べる。
	職場環境に関する研究(B4)	29年	管理職、専門家	性格素因をもつ人でも社員として機能を発揮できるような環境が何か、質的調査を中心に調べる。
課題C 啓発と予防に関する研究	報道の内容分析(C1)	28~29年	報道	新聞・雑誌報道の内容を調べ、一般向けに広められた情報を明らかにする。
	情報提供・啓発活動(C2)★	29~31年	学生、管理職等	研究によって明らかになったことも含め、人々に正しい情報を提示し、その効果を調べる。
	適応支援、予防(C3)★	29~31年	学生、社員	研究成果を利用し、性格素因をもつ人でも適応できるような本人および環境に働きかけるプログラムを作成、試行し効果を調べる。
課題D 生物学的要因と治療に関する研究	生物学的要因との関連(D1)	28~31年	患者	性格素因と、抑うつ度およびバイオマーカーとの関連を、うつ病患者を対象に調べる。
	治療成績との関連(D2)★	29~31年	患者	薬物療法、集団療法を実施し、治療成績と性格素因との関連を調べる。
	課題A~Cの患者調査(D3)★	28~31年	患者	課題A1、B1-B3、C2を患者を対象として実施し、健常群と比較する。

★がついたものは実践的研究、無印は基礎的研究を示す。

3. 研究の方法

紙幅の関係上、本研究課題で行った研究のすべてについて記すことは不可能なので、特に意義のある研究に限って方法を記す。

(1)対人過敏・自己優先尺度に関する研究（課題Aに相当）

大学生（116名）において縦断調査を行った（村中他，2019）。初回では、対人過敏・自己優先尺度と抑うつ指標、2回目では抑うつ指標と調査期間中のストレスを測定した。抑うつおよびストレスの指標は異なるが、一般社員（439名）においても同様の研究を行った（村中他、執筆中）。

新型うつには、勤務時間中は抑うつがひどくなるが勤務時間外には軽快するという特徴がある。しかし、勤務時間内外に分けて心身の状態を測定する尺度はないため、新型うつの発症を予測する研究を行うことが困難になっている。そのため、勤務時間内外に分けて心身の状態を測定する尺度を独自に作成した。400名の一般社員を対象に、この尺度と既存の抑うつおよび不安の尺度を実施し、信頼性・妥当性の検証を行った（Sakamoto et al., under review）。

(2)対人過敏・自己優先とストレス認知との関係（課題B1に相当）

上記(1)で述べたように、対人過敏・自己優先が対人ストレスを経て抑うつにつながるならば、同様のストレスフルな状況に対して、対人過敏や自己優先が高い者はよりストレスフルに感じ、そのため抑うつにつながりやすいという仮説が考えられる。そこで、大学生138名に対し、ストレスフルな状況を視聴覚提示し、その反応（例：感情反応、対処行動への動機づけなど）を対人過敏・自己優先との関係で調べた。同様の研究を280名のパート社員で調べた（山川・坂本、執筆中）。

(3)新型うつの特徴を有する人に対する周囲の人の認知に関する研究（課題B3に相当）

一般に広く知られている従来型の抑うつと比較されることで、新型うつのイメージは形成されてきたと言える。そこで、従来型および新型の抑うつ患者像を文章で提示して、両者のイメージを質問しその違いを調べた（櫻原他，2018；Kashihara et al., 2019；亀山他，2019, 2021）。医療従事者（146名）、学生、会社員を対象に研究を行った。学生では文化的な視点から考察するため、日本（303名）と米国（272名）で調査を行った。会社員では、管理職か一般社員かによって見方が違う可能性があることから、その双方を対象に調査を行った（管理職 245名、一般社員 208名）。

(4)啓発教育によって新型うつのもつ否定的な印象を変える試み（課題C2に対応）

本研究課題のC1にて勝谷他(2018, 2019)が明らかにしたように、新型うつに関して流布している情報は否定的な内容である。その影響もあってか、上記(3)で調べたように、従来型抑うつと比べると新型うつに対する人々のイメージは好ましくなく、新型うつの人に対する援助行動も消極的であった。しかし、偏った情報から否定的なイメージを抱き、援助行動が抑制されることは決して好ましいことではない。そこで、大学における授業内（受講者46名）で新型うつに関する啓発教育を行い、その効果を対照群（16名）との比較で検証した（亀山・坂本，2020）。

(5) 新型うつの性格素因を測定する自記式質問票の開発と生物学的要因との関連性の検討（課題D1に相当）

研究分担者である加藤は、新型うつと従来型のうつと比較して薬物による治療反応性や予後が異なる可能性を提唱しており（加藤ら 2016・Kato PCN2016・AJP2017・2018 含む）、治療初期に新型うつに関連した性格素因を把握することが重要である。そのためには両者の判別を可能にするためのツールが必要であり、うつ病を含む気分障害圏の患者および健常対照群（計340名）を対象として、新型うつの性格素因を簡便に評価可能な自記式調査票の開発に着手した。この調査票を用いて、うつ病患者を対象に新型うつの特性を反映する血液バイオマーカーを探索した。

4. 研究成果

ここでも紙幅の都合から、「研究の方法」に示された研究に対応させる形で、研究の成果を示す。

(1) 対人過敏・自己優先尺度に関する研究（課題Aに相当）

対人過敏・自己優先は、ストレスの影響により抑うつ状態が悪化することが予測された。分析の結果、大学生および一般社員において、この仮説を支持する結果が得られた。すなわち、対人過敏と自己優先が、強いストレスの報告に影響し、そのことで2回目の抑うつ得点が上昇することが見いだされた。これだけでは、対人過敏や自己優先それぞれが、対人ストレスを招く要因となったのか、単にストレスをより嫌悪的に感じ報告しただけなのか、区別は付かないが、この特性が抑うつを強める要因となったことで、対人過敏・自己優先に焦点を当てた予防・介入活動を行うことの可能性を示唆した。

因子分析の結果、不調を示す20項目と快調を示す12項目が見いだされた。不調項目は、既存の抑うつおよび不安の尺度と高い相関を示した。また、勤務時間内と時間外を分けて測定した点については、同時に実施した別の質問（すなわち、抑うつや不安の問題は、勤務時間内と時間外のどちらでより頻繁に生じたか、あるいは同じ程度だったか問うた質問）に対する回答と符合する結果となったことから、測定の妥当性が示された。

なお、本尺度と対人過敏・自己優先尺度の両方を実施した研究の結果を分析中であり、仮説に一致する結果（すなわち、対人過敏・自己優先的な人は、勤務時間内と時間外の不調得点の差が大きいという結果）が得られている。

(2)対人過敏・自己優先とストレス認知との関係（課題B1に相当）

仮説通り、対人過敏と自己優先は、同じ状況に対してよりストレスフルに感じたり、より不適応的な対処の増大につながっていた(例:視聴前後の不快感の増大、回避型対処への動機づけ大、問題焦点型対処への動機づけ小)。

(3)新型うつの特徴を有する人に対する周囲の人の認知に関する研究(課題B3に相当)

新型うつの特徴を有するケースは、従来型の特徴を有するケースに比べて否定的な印象を持たれやすいことが、医療従事者、学生、会社員のいずれにおいても見いだされた。この傾向は、日本・米国、および管理職・一般社員に関係なく見いだされた。しかしながら、新型うつに対する嫌悪度は、米国より日本の学生の方がおしなべて強かった。また、管理職は新型うつの原因を社員の性格に帰属しやすく、新型うつ社員への親近感や理解を示す程度も低かった。このことから、全般的に従来型の抑うつよりも新型うつに対するイメージの方が悪いが、国や立場(管理職か否か)によって、新型うつを否定視する程度は異なると考えられる。

さらに学生を対象とした研究では、別の角度からデータ分析を行い、援助行動を抑制する要因を統計的に検討した。その結果、新型うつのケースに対して、抑うつの原因を個人的要因に帰属しやすいほど拒否的感情を抱きやすく、援助行動が抑制されやすかった。その一方、新型うつのケースに対して親和性が高いほど拒否的感情が抑制されやすく、また原因を状況的要因に帰属しやすく、その結果として、いずれも援助行動を高めることが見いだされた。

これらの研究結果から、新型うつは従来型抑うつとの対比で述べられることが多いが、両者を別物ととらえ、新型うつの特徴を示す人の内なる声に耳を傾けることで、一般の人々の理解や親和性が今よりも高まり、それが援助行動につながる可能性が示唆された。

(4)啓発教育によって新型うつのもつ否定的な印象を変える試み(課題C2に対応)

新型うつについて学ぶ授業(90分)で啓発の授業を行った。これまで報道などでは取り上げられることの少なかった新型うつの人々の悩み(いわば主観的な世界)を受講者に提示することで、一面的な態度を変容するよう教材を作成した。その結果、介入群において援助行動が有意に高く、拒絶的感情が有意に低くなり、また、新型うつの原因を本人の性格に帰属する傾向が有意に弱かった。この結果から、啓発の授業の効果が認められた。

(5) 新型うつの性格素因を測定する自記式質問票の開発と生物学的要因との関連性の検討(課題D1に相当)

新型うつの性格素因を測定する自記式質問票の開発について、「社会的役割の回避」、「自尊心の低さ」、「不平不満」の3因子が見出され、22項目の尺度「樽味の「新型/現代型うつ」病前性格評価尺度22項目版 社会的役割の回避、不平不満、自尊心の低さ(TACS-22)」と命名した。日本大学を含む複数のサイトで開発尺度を実施し妥当性の検証を行った。うつ病患者におけるTACS-22を用いた新型うつの性格素因の判別能はAUC=0.757(感度63.1%, 特異度82.9%)であり有用な尺度の開発に成功した。さらにTACS-22は血中トリプトファンと正相関を示した。ドラッグフリーのうつ病患者と新型うつ患者を比較したところ、血中トリプトファンが新型うつ患者で高いことが示唆され、血中トリプトファンが新型うつと従来型うつを判別する際に有用なバイオマーカー候補となることが示された(Kato et al., PCN2019)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 榎原潤・亀山晶子・山川樹・村中昌紀・松浦隆信・坂本真士	4. 巻 89
2. 論文標題 医療従事者が「新型うつ」事例に対して抱くイメージの実態把握	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 520-526
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.89.17334	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 勝谷紀子・岡隆・坂本真士	4. 巻 89
2. 論文標題 大学生を対象とした「新型うつ」のしろうと理論の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 316-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.89.17311	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 勝谷紀子・岡隆・坂本真士	4. 巻 97
2. 論文標題 社会人における「新型うつ」のしろうと理論の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究紀要(日本大学文理学部人文科学研究所)	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kashihara, J., Yamakawa, I., Kameyama, A., Muranaka, M., Taku, K., & Sakamoto, S.	4. 巻 73
2. 論文標題 Perceptions of traditional and modern types of depression: A cross-cultural vignette survey comparing Japanese and American undergraduate students	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences	6. 最初と最後の頁 441-447
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/PCN.12838	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Kato, T.A., Katsuki, R., Kubo, H., Shimokawa, N., Sato-Kasai, M., Hayakawa, K., Kuwano, N., Umene-Nakano, W., Tateno, M., Setoyama, D., Kang, D., Watabe, M., Sakamoto, S., Teo, A.R., & Kanba, S.	4. 巻 73
2. 論文標題 Development and validation of the 22-item Tarumi 's modern-type depression trait scale; Avoidance of social roles, Complaint and low Self-esteem (TACS-22).	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences	6. 最初と最後の頁 448-457
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/pcn.12842	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Kato, T.A., & Kanba, S.	4. 巻 175
2. 論文標題 Is a Socio-Cultural Analysis of Depressive Disorders a Matter of Concern? Response to Kaiya.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 American Journal of Psychiatry	6. 最初と最後の頁 483-484
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1176/appi.ajp.2018.17121404r	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kuwano N, Kato TA*, Setoyama D, Sato-Kasai M, Shimokawa N, Hayakawa K, Ohgidani M, Sagata N, Kubo H, Kishimoto J, Kang D, Kanba S	4. 巻 231
2. 論文標題 Tryptophan-kynurenine and lipid related metabolites as blood biomarkers for first-episode drug-naive patients with major depressive disorder: an exploratory pilot case-control study.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Affective Disorders	6. 最初と最後の頁 74-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.jad.2018.01.014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Kashihara, J., Yamakawa, I., Kameyama, A., Muranaka, M., Harrison, L., Dominick, W., Marton, V., Nicholas, A., Taku, K., & Sakamoto, S.
2. 発表標題 Cross-cultural differences in perceptions of modern and traditional types depression between Japan and the United States
3. 学会等名 2018 Australian Psychological Society Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山川樹・坂本真士
2. 発表標題 大学生のストレスイベント経験頻度とパーソナリティの関係 経験サンプリング法を用いた調査
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第27回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山川樹・田中江里子・坂本真士
2. 発表標題 うつ病休職者の回復を目指した行動に対する不快感の調査 行為者の状態及び行動種類別の比較
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 亀山晶子・榎原潤・山川樹・村中昌紀・松浦隆信・坂本真士
2. 発表標題 「新型うつ」社員は職場でどう認知されやすいか 医療従事者を対象とした、「新型うつ」社員のピネットを用いた調査から
3. 学会等名 日本健康心理学会第30回記念大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 榎原 潤・亀山晶子・山川 樹・村中昌紀・坂本真士
2. 発表標題 企業における「新型うつ」事例に対するイメージの実態把握 従来型うつ病事例との比較に基づいて
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第26回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 櫻原 潤・亀山晶子・山川 樹・村中昌紀・坂本真士
2. 発表標題 「新型うつ」の社会的認知 会社員を対象としたアンケート調査の分析
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kashihara J., Kameyama, A., Yamakawa, I., Muranaka, M., & Sakamoto, S.
2. 発表標題 The process of stigma toward “modern type depression” in Japan: Findings from mediation analyses
3. 学会等名 18th International Mental Health Conference
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村中昌紀・山川樹・亀山晶子・坂本真士
2. 発表標題 対人過敏傾向・自己優先志向と職業性ストレスが抑うつに及ぼす影響についての検討 - - ウェブ調査による縦断的検討 - -
3. 学会等名 第25回産業ストレス学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p> 日本大学坂本真士研究室 > 一般の方へ https://www.sakamoto-lab-psych.com/blank-5 日本大学坂本真士研究室 > 主な業績 https://www.sakamoto-lab-psych.com/blank-2 </p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	加藤 隆弘 (KATO Takahiro) (70546465)	九州大学・大学病院・講師 (17102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関